

バングラデシュ・ネパール訪問報告

平成20年8月20日 竹谷 和子

- 訪問期間 ・ バングラデシュ 7月31日～8月 7日
- ・ ネパール 8月 7日～8月10日

○ バングラデシュについて

31日午後にバングラデシュ首都ダッカに到着し、2日間アムダバングラデシュのディレクター(プロジェクトやプログラム全般にわたり、考えコーディネートし仕事を進めていく責任者)Mr、ラザック氏のお宅へホームステイ。いつもながらの歓迎で迎えられ、久々の再会に感激。事務所に出席し、アムダバングラデシュ現在の活動の状況や今後の日程等、報告を受ける。またこの日先般本校生徒会中心で実施した地区運動会でのバザー売上金(384\$)をラザック氏へ渡す。

8月2日いよいよガザリアへ。懐かしいスタッフ達に迎えられ旧交を温めるのもそこそこに、アムダの事務所を訪れたテンガッチョハイスクールの生徒達約40名と、交流を深めた。本校生徒会が準備していたものを披露したり、テンガッチョの生徒には自分の誇れるものを絵に描いてもらったり、リコーダーを練習したり、楽しい一時だった。



3日、この日はテンガッチョハイスクールをスタッフ達と共に訪問した。この学校は新しく校舎が建てられる予定で、元の校舎半分が取り壊されていた。生徒は現在300名いるそうだが、一日を前半、後半に分け授業をされている。来年には新校舎で勉強できると喜んでいて。今回の訪問で竹谷はガザリア地区特にテンガッチョハイスクールを基板にバングラデシュのゴミの問題についてとり組んでいこうと提案した。

提案の内容は現在のバングラデシュのゴミの状態を確認しゴミを減らすことが、衛生的にも環境的にもどんなにいいことかを考えてみる・まずはゴミを捨てないことなどである。無意識にいろいろな物をどこにでも捨てていることについて認識させ、自分の家の中だけでなく、道ばたや村全体できれいにしていくことをテンガッチョ村から広げていこうという内容である。



まず、ディレクターのラザックさんへ提案を持ちかけ賛同していただき、他のスタッフ達及び、テンガッチョハイスクールの校長を始め他の先生達にも賛同にこぎ着け、まずはテンガッチョハイスクールの生徒達に話しかけてみた。子ども達はその時、教室のゴミを拾い始めたのには感動した。なんと素直な生徒達。

また、アムダとして新しくとり組まれているプロジェクトで、特に若い女性達をターゲットに、エイズ・ジェンダーの問題・性教育等を始められたことである。各村の十代のリーダー的な女性を集め、ヘルスセンターの保健師が講話をしたりビデオ等使用して啓発・教育をされていた。始まったばかりだが、これが浸透していけばかなりの成果が期待される。このグループの集まりの際にも竹谷はゴミの問題を提案した。

ガザリアのアムダオフィスに3泊4日、滞在したがその間印象深い出来事についてまとめると

- ① ガザリア地区のいろいろな村へ出かけた(マイククロクレジットの様子やテンガッチョ学校の父兄達との交流の為)際にある村人が竹谷に日本から何を持ってきてくれたのかと質問され、返答にあせってしまった。



- ② テンガッチョ学校の生徒達が以前に比べ笑顔がとて増えたこと。



- ③ ヘルスセンターで出産に立ち会い、ドクターの手伝い等をしてとても貴重な体験ができた。



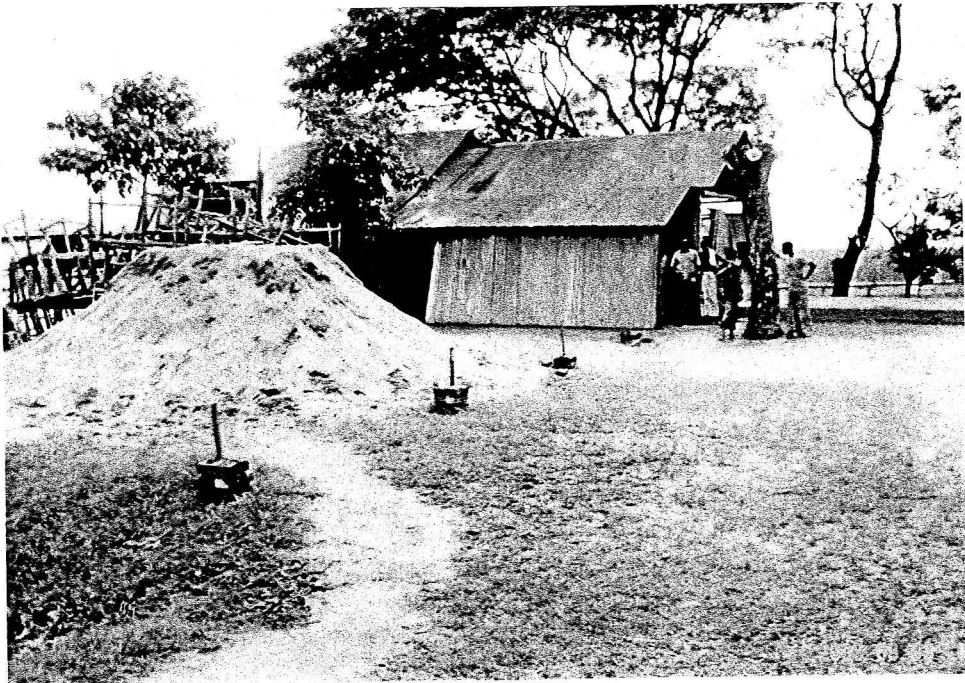
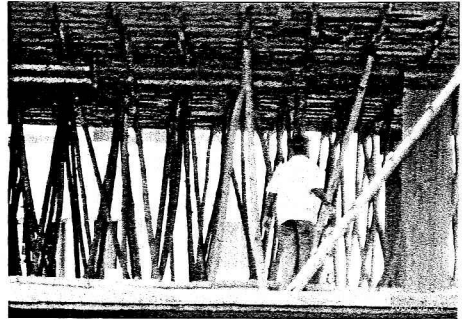
- ④ 日本からカレーのルーを持参しオフィス内で日本のカレー20人分を作りスタッフ達に喜んでいただいたこと。(具材は現地のマーケットで調達)なのである。



ガザリアでの活動を終えダッカへ5日の夜帰る。6日、ラザックさん、AMDA バングラデシュ代表の Dr. ナイームと3人日本大使館へ行きアムダの今後のプロジェクトで資金が必要なこと、活動について理解と協力をして欲しいことを依頼した。お会いしたのは大村一等書記官で、快く話は聞いて頂いた。新しいプロジェクトとはコミュニティラジオを開設することである。なかなか資金繰りが大変そうである。

今現在首都ダッカは元気な都市として紹介され始めている。確かに人口も増え続け、マンションやアパートのビルが次々と建設されている。が物価がどんどん上がり、また排気ガスも増え、人々はいろいろな面で生活しにくくなっている。米の値段も半年で二倍以上値上がり、もちろんガソリンもである。元々の貧困者達はもっと貧困に追いやられどんどん格差が広がっている。

ダッカではラザックさんの家へホームステイさせて頂き、ルナさんや子ども達とも楽しく過ごすことができ感謝です。7日、次の訪問国ネパールへ。



○ネパールについて

主な訪問先は首都カトマンズから南東に位置した、プトワールという町である。今回7回目の訪問である。今年は AMDA の職員として岡山から小林麻衣子さんといわれる女性スタッフ、以前からの馴染みのスタッフ、ドゥルーバさんらの出迎えを受け、ありがたかった。8日、午前中 AMDA 子ども病院を訪問しビノー院長に本校からの支援金を手渡した。



その後、院内を見学し特に新生児の集中治療室を訪れた際気が付いた事は、重篤な新生児が多くベッドが足りなくて、一つのベッドに2人～3人寝かされていた。また保育器が壊れていて使用されていなかったことである。また今年は新たに別棟が建てられ、昨年まで木々や草が生い茂っていた場所へ外来や検査室等が機能していた。昨年夏にこの計画は聞いていたが、実際機能しているのを見て確実に前進していることを感じた。ただ患者数はここ最近横ばいで、伸び悩んでいるとのことである。、なかなか問題も多くこれからが正念場かもしれない。



9日、帰りの飛行機が午後になったので、早朝から小林さんとルンビニへ出かけた。ルンビニはブッダの生誕地といわれネパールの観光地の一つである。インドとの国境が目の前で、賑わうところだそうだが、早朝だったのでゆっくり過ごすことができた。

ネパールもやはり石油の高騰で大変であった。ガソリンスタンドは油を入れる車とオートバイの長蛇の列。一日待っても入れてもらえず、途中でスタンド自体に油がなくなりパンク寸前。ドライバーの中にはわざとインドへ油を入れに行っているという人もいた。日本も大変だが途上国はもっと切実である。

10日午後のフライトでバンコク経由にて11日早朝無事帰国した。



○ 感想

今回2カ国を訪問して特に強く感じたことは「命」ということである。バングラデシュでは、新しい生命の誕生に立ち会い、日本のように設備の整った病院での出産とは違い、もしもの時にどんな対応ができるのか、はらはらしながら見守った。案の定、産声をあげず、チアノーゼで全身青紫色で生まれてきた。しかし医師の適切な処置でおよそ1時間後弱々しくも泣き始めほっとした。「命の誕生だ」とその時始めて感動した。それまでは無我夢中で医師の言われるとおりにサポートをし写真を撮った。我が家には90歳の舅がいることを改めて思い出した。またネパールの子ども病院では生まれて3日目の新生児が髄膜炎(蚊からの感染だと思われる)で手当の甲斐なく亡くなってしまった。悲しかった。そしてその子はしばらくそのままやがて小さい段ボールに綿花を敷き丸裸のままその中に入れて親に渡していた。それを見てまたまたつらくて悲しかった。

生まれたばかりのこれからの命、たった3日の命、すでに90年間の命、人間の力ではどうすることもできない大きな力を感じ、本当に自分は今、生かされているということを感じる。またバングラデシュでは命をいただいているということを感じた。竹谷が日本のカレーを作るときだが、食材仕入れでチキンを手に入れるためマーケットに行った。鶏肉ではなく、ゲージにいる鶏そのものを買って、そこで外回りのみ処理してもらった。事務所に帰り、この鳥を解体しなければならない。まだ生あたたかい肉となれない刃物に手こずり、スタッフ達にも手伝ってもらいやっと準備できた。後は普通通りカレーはできあがったが肉のデリシャスなこと、この上なし。鶏肉の解体は日本でも昔はおこなわれていたが最近ではスーパーに置かれているチキンである。冷たい。このなまあたたかい肉の感触から久しぶりに生・命ということを感じさせてもらった。いただきます。

今回の2カ国訪問は竹谷には、ますます意義深く興味深いものであった。特にバングラデシュにおいては、ただゲストでなく現地の中で短期間ではあるがスタッフ達と共に新しいプログラムやプロジェクトを考え実践していく。またそのプロセスを学ぶことができた。とても勉強になったし訪問している意義も大きかったと考えるが、その分責任も重大でもっと研鑽をつまなければならないと思っている。しかしテンガッチョ学校との友好校としてのつながりもを今後どのように深めていくかが今後の大きな課題でもある。東兎中学校の校長先生をはじめとする先生方の御理解をいただきながら少しずつ前進させていきたい。

竹谷の訪問に関して、いつもながら支援を頂いている AMDA ボランティアセンター成澤様をはじめ、各関係の方々には本当に感謝いたしております。お礼を申し上げます。

ドンノバ

